

どはみな官僚主義の特質である。人間でも社会でもこうなってしまうれば進歩は止まる。

人間は利口でもないがそう馬鹿でもない。湾岸戦争の勝利を祝ってパレードをしているアメリカ人も、すぐにあの愚行に気づいて反省するだろう。ジグザグな進み方をしてもあまりコースを誤らないで行くには、いろいろな意見が自由に出され、反省のうででそれが活かされていく必要がある。

そこで原題に戻る。社会林業はすでに我々が語ったコトバであった。それを知らなかったのも、それを語りたくないと言ったのも「官僚主義」の症候群であった。熱帯林の保全が、開発途上国の辺地の膨大な貧しい人間の抱える問題と分かち難く結びついていることは誰もが知っている。自由な発想で大いに「社会林業」を語るときである。

---

## 新刊紹介

◎消えゆく楽園 (写真 : S. DALTON and G. GERNARD ; 文 : A. MITCHELL : Vanishing Paradise. Century Hutchinson Ltd., London, 1990, pp. 176, 邦価約 6,900 円)

本書は熱帯雨林の動植物写真集である。一般的に熱帯雨林の動植物は種類が豊富で、それらの色彩が非常にカラフルであると言われている。しかし実際に見たことのない人にとって熱帯雨林の様子というものは想像しにくいものである。本書では日本では到底見られないこれら動植物がページを開く度に次々に飛び出してきた、熱帯雨林の様子を覗くことができる。動物相の写真には愛らしいもの、滑稽なもの、そして少しグロテスクなものなどがあり、植物相の写真は一種の芸術作品を見るようである。

熱帯雨林はこれら動植物にとってはもちろん、私たち人間にとってもなくてはならないものである。しかし、今この熱帯雨林がこの本の題名の通り消滅しかかっている。著者もこの点を本書の中で繰り返し訴えているし、また本書にでてくる動植物が熱帯雨林で見れなくなることがあってはならないとしている。これらのことも考えながら、この写真集を見るのも一つの見方であると思う。

(木下裕正)